

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：34409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531036

研究課題名(和文) タクト豊かな教師の育成とリフレクションの関連に関する研究

研究課題名(英文) A study on the relationship between reflection and development among tactful teachers

研究代表者

村井 尚子 (MURAI, Naoko)

大阪樟蔭女子大学・児童学部・教授

研究者番号：90411454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼稚園から高等学校、大学にまで至る教師、保育士が、個別的な実践の状況において子どもにとってより善い方向へと向けて振る舞える能力を「教育的タクト」とし、教師の専門性の一環として位置づける。

まず、教育的タクトおよび教育に関する諸概念を原理的に検討し、定義付けを行った上で、タクト豊かな教師を育成する方法を実証的に探究した。子どもが生活世界をどのように経験しているかを現象学的に理解する。実践の中で出会った子どもとの状況をリフレクションし、その意味を考察する。この2つの方法をリアリスティックアプローチを取り入れながら実践し、その効果を検証した。

研究成果の概要(英文)：Tactful teachers can sense the pedagogical significance of a particular situation and act in the best interests of a child. In this study, I define pedagogical tact in terms of a teacher's expertise and explore conceptual definitions of pedagogical tact and related ideas on pedagogy. I examined the ways in which the tactfulness of teachers and student teachers can be developed. First, to understand the child's lived experience, it is important to think deeply about the child's situation and mind. I found that phenomenological inquiry in classes is effective in understanding the child's lived experience. Next, reflection on past experiences of student teachers and teachers in classrooms is valid, and this assumption is examined using the realistic approach. Student teachers were able to think deeply in the best interests of children through reflection methods.

研究分野：教師教育学

 キーワード：教師教育 教師の専門性 リフレクション 教育的タクト ヴァン＝マーネン 現象学的教育学 子ども
 の生活世界 実践知

1. 研究開始当初の背景

平成24年度当初の研究開始時においては以下のような状況であった。

教師の専門性としての「教育的タクト」の涵養とリフレクションの関係性

教師の専門性を「教育的タクト」という概念で規定することは、ヘルバルトを皮切りに多くの研究者によって検討されてきた。ただし、「教育的タクト」をどのように涵養するかについては、国内外の研究を概観しても、十分な研究が行われていない状況であった。また、諸外国でも「リフレクション」を研究テーマとする論文が増加しつつあった。我が国でも、ドナルド・ショーンの「反省(省察)的实践家としての教師」概念が日本に紹介されて以降「リフレクション」という概念が教育学の中に浸透しつつあったが、「リフレクション概念」を原理的に明らかにした研究は管見の限り行われていなかった。さらに、教育的タクトとリフレクションの関係性を研究した論文等は見られなかった。

オランダの教師教育者フレッド・コルトハーヘンが中心となって開発した「リアリスティックアプローチ」は、武田信子によって我が国に紹介され、コルトハーヘン本人の来日講演が2010年に日本大学などで実施されていた。報告者は2011年にオランダユトレヒトでコルトハーヘンのワークショップを受講したが、当時は日本で実際にリアリスティックアプローチを大学や現職研修で実施している例は見られなかった。

2. 研究の目的

本研究では、実践において教師や教育実習生(その他子どもの教育に携わる者)が出会った「教育的契機」における判断と行為をリフレクションすることによって、タクト豊かな教師を育成していくことが出来るという現代カナダの現象学的教育学者マックス・ヴァン＝マーネンの説を理論的かつ実践を通して検証することをめざした。さらに、この方法を、現在ユトレヒト大学を中心に欧米の教師教育学界に大きな影響力を与えるに至っているリアリスティックアプローチの枠組みに載せていくことを試みた。このように、新旧のユトレヒト大学の教育学研究を有機的にリンクさせることで、より実践に資する教師を育成していくことが可能になると考え、その理論的検討および実践の理論的検証、研修などの実施による実践的なアプローチを行うことで、教師の専門性を高めることをめざした。

3. 研究の方法

<理論研究>

ヴァン＝マーネンの現象学的教育学をデリダ、レヴィナス、リングスなどの哲学的見地から探究した。

教育的タクトの原理的探究：ヴァン＝マーネンの教育的タクト論の研究を行った(ただ

し、実践知としてのタクトをフロネーシスの観点から探究する部分に関しては、まだ論文にまとめられていない)。

子どもの生活世界への現象学的考察(秘密家などのトピックに関して)

<実践的研究>

教育的契機のリフレクション：学生が実習中に会った教育的契機について記述することでリフレクションを行う。この一連の過程の実践的検討。

リアリスティックアプローチを用いた対話形式のリフレクション：実習やその他の場面での出来事について他者の援助を受けながらリフレクションを行う。この一連の過程の実践的検討。

とを融合させた取り組みの実践的検討。

授業における現象学の実践：学生とともに現象学的方法論で子どもにとっての秘密や家の意義を検討した。この実践の検証。

<研究成果の還元とその成果について>

ここまでの研究成果を教員養成や看護師養成などに携わる大学教員に対してワークショップ形式で伝える。その成果についての実践的研究(一般教員へのFD研修への応用や現職研修については2015年度以降に実施していく予定である)。

4. 研究成果

1) ヴァン＝マーネンの教育学と教育的タクトの原理的探究

ヴァン＝マーネンの著書『教育的な感受性とタクト *Pedagogical Sensitivity and Tact*』の翻訳作業を終え、出版社に原稿を提出した。出版はまだなされていないが、この著書及び他のヴァン＝マーネンの論文や著書を元に、彼の教育理論の原理的な考察を行った。

気がかりとしてのケア

本研究では、ケアという語を実践的な行為として捉えるケアリング論とは方向性を違え、ケアという語の語源を辿った。ケアは元々は気にかかる、気がかりという意味合いを強くもち、ハイデガーの存在論の中心的概念である *Sorge* を手がかりに考えることで、我々の生の有り様が照らし出されてくる。気がかりとしてのケアは、親であることの副作用ではなく、気にかけていること自体が親であるという生活そのものであると言える。言い換えれば、気がかりは親であることの原料であり、子どもの生へと自身の生を寄り添わせる接着剤の役割を果たす。子どもの側から見れば、ケアしてくれる＝気にかけてくれる存在が、子どもが育っていくためには不可欠なのである。この気がかりは、親であるかぎりずっと続く慢性の病とも言える。この点を明らかにした。

応答としてのケアの可能性と不可能性

親や教師として我々が、なぜ子どもをケアするのか。その根源的な理由についてヴァン＝マーネンは、非媒介的で直接的な出会いによるものとし、その契機をレヴィナスの「顔」の到来

という理論によって読み解く。レヴィナスによれば、他者との出会いとは、その人の「顔」を見ること、私を呼ぶその人の声を聞くことである。そのことによって私は、不可避的に応答することを迫られる。つまりケアする責任を感じるのである。しかしデリダによれば我々は、いっときには一つのこと、一人の他者のことしかケア（気にかけることが）できない。他の多くのケアを必要としている他者への責任を担えないという事実は、我々に倫理的痛みをもたらす。しかし、ヴァン＝マーネンはその痛みこそを大切にす。教師は特定の生徒の「顔」に向き合っていると感じ、その生徒について気にかけているからこそ、自分が責任を負っている多くの、ときに「顔のない」他の生徒すべてに対して繊細でいられるのである。

ヴァン＝マーネンにおける教育的関係論の特質

教育的関係という概念はとりわけドイツの教育学研究において重要で根本的なものだとみなされてきた。ヘルマン・ノールが1930年代にまず教育的関係という概念を提唱し、それはボルノウによって引き継がれた。ヴァン＝マーネンはその影響を受けつつ、彼独自の現象学的方法によって教育的関係論の概念を新たに展開している。ヴァン＝マーネンはアルフォンソ・リングスの「コンタクト」という概念を用いて関係性の意味を再定義する。すなわち、関係のうちにあるということは互いの領域のうちにあるということであり、互いの風景を旅することを意味するのである。ここに教育的関係のもつパトスの側面が問題となる。それは能動的でありかつ受動的なものである。コンタクトは我々がその人にとって重要な、その教師、その生徒にとって重要な何かに触れたとき、あるいは何かに触れられたときに生じる。それゆえ、コンタクトの経験はつねに道徳的な行為、あるいは倫理的な応答だといえるのである。

ヴァン＝マーネンの教育的タクト論

教室の中の生活は非合理的な性質をもつものであり、教えること自体は単なるテクニクで済ませられるものではない。教えるという実践には、刻々と変わり続ける状況の中でどのように行為するかを即座に知る即興的なタクトが求められるのである。マックス・ヴァン＝マーネンは、ヘルバルトの影響を受けつつ、彼独自の教育的タクト論を展開している。タクト豊かな教師はそれぞれユニークな質をもつ状況において、まさに正しいことを言ったり行ったりすることができるのである。彼は教育的タクトの特徴を表すために現象学的方法を用いて記述を行うのであるが、さらにこういった方法を用いて、日々の実践や過去の経験を省察（リフレクト）することによって、また、教師が教育的な思慮深さやタクトを身につけることができると主張している。

タクト豊かな教師になるための授業実践と非連続的な「出会い」としての教育的契機
教師をめざす学生あるいは現職で教職に就いている教師がタクト豊かな教師になる

ためには、子どもとの状況を「教育的契機」として切り取り、そのリフレクションを行うことによって、状況への感受性を高めていくこと、生活世界において子どもが様々な事象をどのように経験しているかを現象学的に理解することが必要であると考えられる。報告者はこういった連続的なプロセスを通じてタクトを涵養していく方途を大学の教員養成課程や現職研修、教師教育者研修などで実施しているが、事前に計画不可能な非連続的な「出会い」によって教師としての有り様が根本から変容することもある。本研究ではドイツの教育学者ボルノウの概念を参照しながら、報告者自らが経験した出会いを現象学的に記述し、できる限り精緻な分析を行った。

2) 子どもの生活世界への現象学的探究

子ども期における秘密の意義について

Max van Manen, Bas Levering, *Childhood's Secrets: Intimacy, Privacy and the Self Reconsidered*, Teacher College, Columbia University, 1996を参照しながら、我が国の子どもの育ちの現状を合わせて考察を行った。「子どもの心の理論の発達と秘密を保持する能力の獲得との関係性に関する現象学的考察」、「子どもが仲間集団を通じて社会化し、親や教師から精神的な自立を遂げていく過程において秘密を持つことがいかなる意義を持つかについての実証的・現象学的考察」、「子どもが他者に対して秘密を持つことを通じて内的自己との内省的対話を行うこと」という3点からの原理的考察を行った。さらにこれらの原理を教員養成課程の授業の中で学生達と協同的に考察、議論をしていくことを通じて、学生の子ども理解がどのように深められたかを、秘密についての受講生の記述の深まりを検討することによって明らかにした。

子どもにとっての家の意義

子どもにとっての「家」のもつ意味を、ユトレヒト学派及びそれを引き継いだヴァン＝マーネンの現象学的人間学的手法を用いて明らかにした。具体的には学生と共に創るワークショップ型の授業（「乳幼児と教育学」）において様々な角度から子どもにとっての「家」の有り様を明らかにしていくことをめざした。学生達が「家」のもつ意味、家族が子どもの成育に与える影響を授業の中で体感的に理解することができたと考えられる。この成果は引き続き2015年度に研究発表を行うが、日本保育学会第68回大会において第1弾の報告を行った。

生活世界における経験を現象学的に明らかにするだけでなく、授業において学生が「現象学する doing phenomenology」ことで、子ども内面の有り様に感受性豊かに気づき、子どもの育ちの基盤を支えていける教師（タクト豊かな教師）に育ち得ると考えられる。

3) リフレクションの原理的考察

省察の実践家概念は教師の専門性を基礎

づける概念として教育学研究において一定の位置づけを得ている。しかし、その鍵概念となる省察の意味するところについては、これまであまり詳しく検討されてこなかった。本研究ではまず、ショーンが『省察的实践とは何か』の中で用いている行為の中の省察を3つの意味で用いていることを明らかにした。第一にショーンは、行為の中の省察の前提となる行為を比較的長い期間を指すものとして用いている。行為のただ中における省察も想定されているが、言語を媒介とするこの省察は、行為を中断することを前提とし、その中断自体の有用性が主張されている。しかしヴァン=マーネンによれば、教室で教師が子どもと対峙している状況においては、我々は、教師として子どもにとって善と思われることをほとんど熟考したり計画したりしないままに判断し行っている。ここで要求されるのが教育的タクトなのである。教育的タクトは、それが「教育的」である限り、何よりも子どもの善に向けて行われなければならないという意味で、通常省察とは異なるものである。それは行為に先立って行われる省察、行為の後に回顧的な仕方で行われる省察を繰り返すことによって培われていく。しかも、省察の仕方そのものを省察するという現象学的な仕方においても行われることが重要なのである。

4) 教育実習の振り返りににおける記述的方法の実践的検討

教育実習生が実習現場で出会った自身の経験を振り返るために、「教育的契機」と「エピソード記述」の二つの枠組みを用いて記述を課している。「エピソード記述」は教員養成の現場において広く用いられているが、「教育的契機」は筆者がヴァン=マーネンの議論から着想を得て用いている独自の枠組みである。本研究では、この2つの概念枠組みによって、実習生達が4週間の教育実習における経験のなかから実習生がそれぞれについてどのような出来事を焦点化したかを明らかにした。「エピソード記述」と「教育的契機」の記述において実習時の経験を取り出す試みは、それぞれ、自身の経験に肯定的な意味付与をすることが出来る、オルタナティブについて記述することで、その時点の経験への省察がさらに深まり、次の状況へと繋がられるといった評価が可能であった。

どちらの記述も、コルトハーヘンの8つの問いを用いたリフレクションを通じて、さらに子どもの内面への考察が深まっていることが見て取れる。当時の状況の中に自らを今一度投げ入れ、さらに自身の思考・感情・欲求・行動を追体験することで、よりアクチュアルな気づきへと繋がることになったと言える。二つの記述を用いるこの手法は、それぞれ実習へのリフレクションにおいて一定の意義をもち得るのではないかと考えられる。

5) 教育実習などの振り返りににおけるリアリ

スティックアプローチの実践的検討

幼稚園と保育所における実習への事後的な指導をする際に用いているリアリスティックアプローチが、実習中の経験への振り返りにどのような意義を持ち得るかを実証的に検討した。リアリスティックアプローチでは、グループワークを通じて、学習者(ここでは実習生)が実習で出会った経験についてグループの他のメンバーに話す。メンバーは相談者、コーチ(聞き役であるとともに、相談者に省察を促す)と、二人のやり取りを見てさらに助言(あくまで肯定的な助言)を加えるコーチのコーチの役割を分担する。コーチは、相談者の話を丁寧に聞き、更なる省察を促すために子どもと相談者それぞれの視点に立ってその場の状況を捉え直すことを目論みた8つの質問を行なう。そうすることで、相談者は他のグループのメンバーとともに新たな気づきを得、次の実践において行為する際の選択肢が拡大するのである。2012年に上海で行われた国際学会、および韓国とインドネシアで開催されたPECERAにおいて、報告者自らが授業で行なった事例をそれぞれの観点から挙げ、リアリスティックアプローチを初等教員養成に取り入れていくことの可能性と利点を明らかにした。

6) 教師教育者への研修のあり方の実践的検討

コルトハーヘン教授を招聘しての学内ワークショップの実施

大阪樟蔭女子大学の教員養成課程(中高および幼稚園、小学校の養成課程)にリアリスティックアプローチを用いた授業方法を導入した。その端緒として学内の養成課程に携わる教員を集めて2014年春に「樟蔭リアリスティックアプローチ研究会」を立ち上げ、勉強会を重ねている。来日中のコルトハーヘン教授を2014年11月6日日本学に招聘し、研究会のメンバーを対象にしたワークショップを実施した。本ワークショップを受講した教員4名及び当日病気で欠席した1名は、その後の養成課程の授業の実践にリアリスティックアプローチの考え方を取り入れ、学生にとってのリアリスティックな学びを志向した授業を行っている。研究会の活動の成果は、2015年2月25日に実施した「樟蔭リアリスティックアプローチ科研報告会」で報告を行い、全国から10名以上の参加者を得た。

教師教育者のためのリフレクションのワークショップの実施とその成果報告

これまでの理論的研究の成果、大阪樟蔭女子大学教員養成課程の授業での実践の成果を国内各地の教師教育者(教員養成に携わる大学教員や看護師、日本語教師などの養成課程に在籍する大学教員)を対象として、ワークショップ研修の形式で伝達する機会を持った。具体的には、2014年9月のコルトハーヘン教授来日前の勉強会(大妻女子大学)、2014年12月のリアリスティックな教育原理のあり方についての研修会(青山学院大学)

2015年3月の科研報告会(青山学院大学)において報告した。12月の研修会の成果に関しては、『青山インフォメーション・サイエンス』第42巻において論文の形で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者には下線)

[雑誌論文](計10件)

1) 村井尚子「教師教育における『省察』の意義の再検討 教師の専門性としての教育的タクトを身につけるために」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第5巻、175-183頁、2015年(査読無)。

2) 村井尚子「エピソード記述と教育的契機の記述による教育実習へのリフレクション」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第5巻、185-194頁、2015年(査読無)。

3) 坂田哲人・村井尚子「『教育の基礎理論に関する科目』のリアリスティックな授業実践」『青山インフォメーション・サイエンス』第42巻、4-9頁、2015年(査読有)。

4) 村井尚子「ヴァン=マーネンにおける教育的関係論の特質 コンタクトの教育学に焦点づけて」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4巻、169-179頁、2014年(査読無)。

5) 村井尚子「ヴァン=マーネンの教育的タクト論-定義と特徴」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4巻、181-192頁(査読無)、2014年。

6) 村井尚子「子どもと秘密 教育的な敏感さの涵養を目指す授業実践の報告」『子ども研究』大阪樟蔭女子大学附属子ども研究所第5号、31-36ページ(査読無)、2014年。

7) 村井尚子「応答としてのケアの可能性と不可能性」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第3巻、203-212頁、2013年(査読無)。

8) 村井尚子「気がかりとしてのケア 教育とケアは分離可能か」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第3巻、191-202頁、2013年(査読無)。

9) 村井尚子「子どもと秘密③-自己への気づき」『子ども研究』大阪樟蔭女子大学附属子ども研究所第4号、29-31頁、2013年(査読無)。

10) 村井尚子「子どもと秘密②-秘密と仲間集団」『子ども研究』大阪樟蔭女子大学附属子ども研究所第3号、28-31頁、2012年(査読無)。

[学会発表](計12件)

1) 村井尚子「子どもにとっての家の意味-授業における現象学的探究-」日本保育学会第68回大会自由研究発表、椋山女学園大学、2015年5月9日。

2) Naoko MURAI, Encounter: the Discontinuous Experience of becoming a Tactful Teacher, The 33rd International Human Science Research Conference, St. Francis Xavier University, Canada, 2014年8月15日。

3) Naoko MURAI, Reflection on the Pedagogical Moment: Using the ALACT Model, The Pacific Early Childhood

Education Research Association 15th

Annual Conference, Bali Indonesia, 2014年8月9日。

4) 村井尚子「子ども期の秘密-授業における生きられた経験の探究の試み」日本保育学会第67回大会自由研究発表、大阪総合保育大学、2014年5月17日。

5) 村井尚子「教育実習指導における教育的契機の記述とエピソード記述」日本乳幼児教育学会第23回大会自由研究発表、千葉大学、2013年11月23日。

6) 村井尚子「ヴァン=マーネンの教育的タクト①-定義と特徴」日本教師教育学会第23回大会自由研究発表、佛教大学、2013年9月15日。

7) 武田信子・山辺恵理子・村井尚子「教員の資質能力という概念をめぐる議論と課題」日本教師教育学会第23回大会自由研究発表、佛教大学、2013年9月15日。

8) Naoko MURAI, To be a Tactful Teacher: continuous process and discontinuous experience, The 32nd International Human Science Research Conference, Aalborg Denmark, 2013年8月15日。

9) Naoko MURAI and Yuko AKAMINE, Reflection to be a Professional Kindergarten Teacher: Using the Korthagen's ALACT model, The Pacific Early Childhood Education Research Association 14th Annual Conference, 梨花女子大学、韓国、2013年7月5日。

10) Naoko MURAI, To be a Tactful Teacher: reflection on pedagogical moment, The Third East Asian International Conference of Teacher Education, 上海華東師範大学、中国、2012年12月6日。

11) 村井尚子「初等教育教員養成におけるリフレクション」日本教師教育学会第22回大会ラウンドテーブル話題提供、東洋大学、2012年9月9日。

12) 村井尚子「教師教育における『リフレクション』の意義-ヴァン=マーネンの所論を中心に」日本教師教育学会第22回大会自由研究発表、東洋大学、2012年9月8日。

[図書](計2件)

1) 村井尚子「ヴァン=マーネン」上條晴夫責任編集他 31名の分担執筆『教師教育-いま、考えるべき教師の成長とは』さくら社、2014年、170-175頁。

2) 村井尚子「教師教育のリアリスティック・アプローチの試み 保育所実習への『リフレクション』の取り組み」『教師のリフレクション(省察)入門』ネットワーク編集委員会編、学事出版、2012年、55-57頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村井 尚子 (MURAI, Naoko)

大阪樟蔭女子大学児童学部・教授

研究者番号: 90411454